

白選送五十首



三枝昂之

さいぐさ・たかゆき 1944年、山梨県生まれ。高校時代に歌作を始め、早大の早稲田短歌会で現代短歌を吸収。'92年に今野寿美たちと歌誌「りとむ」創刊。『農鳥』で本年度若山牧水賞を受賞。歌書に短歌表現史論『うたの水脈』、評伝評論『前川佐美雄』、『現代短歌の修辞学』ほか。

まみなみの岡井隆へ 赤軍の九人へ 地中海のカミュへ

『やさしき志士達の世界へ』

霜は花と咲きて凍れる冬の詩を星とならざる射手にささげむ

ウインドに黄昏の陽が満ちたれば海がふたりのあこがれとなる

早稲田車庫こえて時々プラトンのようなひとりに会いにゆきしも

『水の鞆権』

ひとり識る春のさきぶれ鋼はがねよりあかるくさむく降る杉の雨

あかるさの雪ながれよりひとりとなし終の敵、終なる味方

『地の燠』

さまざまな契機をつかみかつのがし手はふたひらのあやめのごとし

『暦学』

灯に寄りてこぼす鱗粉 引力のはるけきものは机上にとどく

鳩舎もつ家の夕焼けどのように昏れてもいまだ戦後は匂う

丘の上の公孫樹かがやきかたわらに添うものなき空の黄葉

やがて言葉は意味を喪い樹は地つちにわれは祖先の無名に帰る……

初出作品を再検討し、取捨選択して歌集が

構成される。選歌率は五割か七割か、そのつど違う。そもそも雑誌発表の初出作品が既に取捨選択の結果である。初出段階で選ばれ、歌集の編集段階で選ばれ、さらには全歌集から五十首という条件下で選ばれる。これほど厳しいハードルを乗り越えれば珠玉の作品ばかりかといえは、これがそうではない。

例えば私の手元に、連れ合いで同業者でもある今野寿美こんのすみが選んでくれた三枝昂之五十首選がある。それと、今回私自身による選と、作品はかなり違う。いわゆる「いい歌」というのがどちらの選に多いのかは分らない。

白選歌集といった類は多くの場合、プラス点の多さよりもマイナス点の少なさを基準に

真に偉大であった者なく三月の花西行を忘れつつ咲く

死にてゆきたる真理あまたを想うとき螢雪という比喩をいとしむ

三田線は高架にいでて果てむとす辛勝も勝ち奇勝も勝利

むこうから来て父となるなりゆきの否応のなき花とも思う

齢一つ加えて歩む春霞芽吹けばなべて身中の花

緑蔭をゆきつつ想う父の夢継がざるものはいまだあたらし

男児おのこわらいてわが膝の上にくずるれば獅子身中の花のごとしも

転がして掌にあそびたるかたつむり昭和果てゆくひかりならむか

灯の下に來し四歳のやわき掌がわが頭をなでて立ち去りゆけり

犀の角雨をはじきて東京に流れ着きたるもの見つめ合う

このくにに根づかざりけるひとつにて永世中立国家日本

ぎんなんを潰して歩む昼しずかいやはてという思いはしずか

風生れて表も家族もそよぎたり季節みじかきものなびき合う

森の時間棄てたる者の裔として家族は木の実灯の下に食む

小さき手をひらきて示す化石あり姿滅びぬ千年あわれ

丘の辺に小学校の鐘響き日々の旅人としてわれは聞きたり

目薬を一滴注してまろびたり春窮という死語あたらしき

風荒れて丘は花びらだらけなり千年変わらぬ季節おそろし

ゆつくりと悲哀は湧きて身に満ちるいずれむかしの青空となる

壊れたるものさまざまな春の雨たとえば戦後史の坂の上の雲

「塔と季節の物語」

「太郎次郎の東歌」

「甲州百目」

して選ばれている。典型例は岩波文庫の与謝野晶子自選歌集だろ。これで晶子の世界を理解したつもりになると、有無を言わせぬ晶子の初期の迫力はどこかに行つてしまつて、明治三十年代の和歌革新運動は、実に心許ないものになつてしまふ。

それが自選の尺度だとすると、この行為はかなり恐い。そもそも、雑誌初出作品を選ぶときに洩れた作品は、永遠に日の目を見ない。歌集収録から洩れた作品もたぶん闇に葬られる。自選とは、目をつぶつて丁半を決める行為に近い、とも感じることもある。

一首目は第一歌集の巻頭歌である。岡井隆は当時、歌を棄てて九州で隠れるように暮らしていた。赤軍の九人は日航機をハイジャックして日本脱出をした連中である。カミュは交通事故で突然この世からいなくなった。つまり、《此処》を棄てた者たちへの呼びかけの中で、《此処》にいるほかない青春の絶望を表そうとした歌である。今ではもう滑稽極まりない悲嘆だとも言えるが、こういう形でしか表せなかつた時代の声もあつたのではないか。この悲嘆をどう振り切り、当たり前前の生活の中に自分の世界をどう組み立てるか。それがわが歌の軌跡だったのかもしれない。

今回の自選作業を通じて、そんなことをしはし思った。

掌のなかに宇宙はありと思うまで甲州百目肉透きとおる

陸橋に今年想うはあわれなり遠き冠雪を見て歩み出す

甲斐が嶺の神代桜咲きなむか心で会いて春を逝かしむ

静かなる沖と思うに網打ちて海に光を生む男あり

まだ丘は樹木の奥に霧がある私はまれにふくろうとなる

冷えて冷えて人は寄らねど咲き競い容赦なし花の開く力は

海という言葉母から聞かざりき海なき九十一年を過ごししか母は

桃咲いて甲斐天領のほのあかり母の視界もゆるぶであろう

起き伏して冬の山美し初鹿野が甲斐大和へと名を移せども

名をつける行為さびしも〈回天〉というちっぽけな鉄のかたまり

甲斐は峽かにして貝の国はろばると舌がよろこぶ煮貝のあわび

〔農鳥〕

叙事がそのまま述志でもあり鼓舞である明治軍歌は日本晴れなり

夜のうちに降って積もつて陽を溜めてわれを泥ませる春の雪よし

人間の技美しき早苗田が水と呼び水が夏雲を呼ぶ

東国は早苗の季節水の季節水のむこうに水がひろがる

教室に乙女が語る夢ぞよし目を鎖せば夢はすぐそこにある

黒い日傘はらりと開きふたむかし経ても変わらぬかたわらの人

もろもろに泥みし夜半に階下りておのれ量はからむと計器はかりに乗りぬ

立ち直るために瓦礫を人は掘る 広島でも長崎でもニューヨークでも